

# 教育研究業績書

2020年10月27日

所属：英語キャリア・コミュニケーション学科

資格：准教授

氏名：宇佐美 彰規

研究分野	研究内容のキーワード
言語教育・コミュニケーション	異文化コミュニケーション, 専門科目英語 (ESP), ビジネスコミュニケーション, 協働学習
学位	最終学歴
修士 (言語教育情報), MBA (国際ビジネス)	立命館大学 言語教育情報研究科 英語教育学 修士課程終了 Hofstra University, Master of Business Administration (MBA)

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. ESP的視点を取り入れた英語授業	2019年9月～2020年1月	ビジネス・コミュニケーション系の学生が、学期を通じて興味のある企業・業界の経済活動を調査し、収集した情報の分析を積み重ねていく活動を取り入れた。毎授業では学生個々の調査結果をクラスメート相互で協議しながら、疑問点をさらに見つけていくワークショップ形式の授業を展開することで、学習過程にも目を向けた授業を実践。
2. ワールドカフェ方式を導入:受講生同士の交流活性化	2019年4月～現在	所属クラス、出身地、出身高校、学年が違えば、異なる文化を持つクラスメートである。価値観もそれぞれで違う受講生個々が教室全体で学び合いを深めていく事を目標にワールドカフェ方式のワークショップを導入。課題解決に向けた授業では、それぞれの意見を尊重し、そしてリラックスした交流を柱として、他テーブル（グループ）とメンバーをシャッフルしながら、学生同士の関与と対話を増やし、多様な意見に触れて、より多くの考えを結びつけるグループワークに注力した。
3. ビジネスコミュニケーション入門	2016年9月～現在	グローバル人材とは？を主題として、その要素を考えさせ、グローバル人材の定義とそのイメージ像をクラス全体で共有した。そこから発展させて、「グローバル企業で活躍できる人材」を身近な人物、芸能人から選定し、その選択理由とどのような職種で活躍可能かを題目として、クラス全体でディベート授業を展開した。
4. ビジネスコミュニケーション基礎・ビジネス英語ケーススタディー	2016年6月～現在	グループワークを軸に、最初に企業が提供する付加価値を考え、関心を持った企業に関する全てのステークホルダー（利害関係者）を特定する作業を行う。その応用として、身近な大学という教育機関の視点から、ステークホルダーを調査し、個人や我々だけの利益を求めめるのではなく、環境、地域、地球、社会などの周囲まで含めた関係があってビジネスとコミュニケーションが成立していく調査学習を行なった。
5. ビジネスコミュニケーション・国際ビジネスコミュニケーション	2016年04月～現在	学生参加型を基本とした授業展開を行なっている。小グループに分かれて、問題解決や課題学習に取り組み、学生間コミュニケーション、意見交換、意見発表の機会と量を増やし事が狙いである。また、グループとして目標を掲げ、その達成に向けて行動していくことを学生が経験する授業実践例である。
6. 異文化ビジネスコミュニケーションの実践	2016年04月～現在	学生たちが、異なる文化間のコミュニケーションや行動の違いを話し合い、そこで得られた知識をベースとして、ケーススタディを用いた授業に取り組んでいる。学生たちの聞く姿勢、質問する力、ディスカッション力の向上を目指すだけでなく、授業の最後には、異なる考えを持つ同士がそれぞれを理解しようとする相互理解の意識を高めたクラス一体感で最終授業を迎える結果となっている。
7. CALL授業におけるTA（留学生）との交流活動	2016年04月～2016年07月	CALL授業におけるオンライン学習やPCソフトに向けた発音練習だけでなく、Teaching Assistantとしてアジア圏留学生に参加してもらい、5分間のTALKセッションを毎授業の開始時に設けた。機械に向かうだけでなく、実際のコミュニケーションで双方向交流を実践し、相手に関心を持っていくことが語学習得の目標であることを意識してしてもらうように努めた。学生たちの英語学習意欲を高める活動であったことがアンケート結果から分かった。
8. 学生の授業への取り組みを高めるコミュニケーションシートの活用	2015年04月～現在	授業内外の学習姿勢を含めた学生と教員のコミュニケーション媒体として1枚のコミュニケーションシートを活用した授業を実践した。学生一人ひとりとの対話を積み重ね、学生の授業参加を向上させていく成果を挙げている。
9. 経済学部2回生へのESP授業の導入	2014年04月～2014年07月	グループ毎に選択した1つの企業の株価を定点観測し、①企業業績の影響、②世界規模に展開されるビジネス、③経済状況、④国際情勢の視点から、株価変動の要因を情報収集し、その分析・調査結果をプレゼンテーションする。グローバルに展開している企業の現状を知るだけで

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
10. 協同学習を活用した再履修英語クラスの取り組み	2013年10月～2014年01月	なく、グループの取り組みでチームワークの大切さも経験することが狙いの一つである。 英語が嫌いという学生が多く占める再履修クラスでは、個人学習の負担を求めるのではなく、グループ活動をメインとした相互交流を促す授業を構成した。学年・所属学部・出身地・サークル・趣味といった多様なバックグラウンドを活用して、多様な学生の異質な組み合わせを作りながら、コミュニケーションの経験を蓄積し、授業参加を促す協同学習の実践例である。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. Kickoff English Mystery 「キックオフミステリー」楽しく学べる総合英語	2019年04月01日	不思議で謎めいたミステリーを題材としたフルカラーの初級総合教材として、基礎的な語彙や表現を「覚える」だけでなく、効果的に配置された、リーディング、ライティング、リスニングの練習問題を解くことで総合的な「考える」英語力を養成を目標とした、初級レベルの授業に対応できるよう編纂。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 附属中高SEコース学生～大学講座～	2019年6月25日	”コミュニケーション”の定義をクラス全体で協議し、英語を媒体として慣行される国際ビジネスの事例を紹介した。その上で、海外企業とのビジネス活動で生じるコミュニケーションの問題点を言語、文化、論理、習慣の側面から考察していく探求を対話形式の授業で実践した。
2. 『さらなる大学教育質向上のために』教育・改革プランライティング・プラザの設置	2016年4月～現在	学内の横断的なチーム編成で、国内外の社会で活躍できる女性リーダーの育成に向けて、英語と日本語の論理的なアカデミックライティング力を身につける自律学修環境の提案を行った。2016年4月設置以降、平均稼働率は80%を維持し、延べ1500人以上の利用者がいる。
3. 「より良い授業方法の工夫と実践」に取り組む教員への奨励制度 受賞	2016年08月19日	平成28年度前期担当科目「リスニング1A」において「より良い授業方法の工夫と実践」に取り組む教員への奨励制度において学長より表彰された。
4. 武庫川女子大学附属高校 入学前授業 講師	2016年02月22日	入学予定の高校3年生を対象に、ビジネス活動の基本であるコミュニケーションの成立という観点から、グローバルコミュニケーションや英語力について考える講義を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 中学校・高等学校 教諭専修免許状（英語科）	2011年3月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 共和レザー株式会社（Kyowa LeatherCloth USA 出向）	2004年09月～2007年09月	米国駐在員として、子会社（ミシガン州デトロイト）設立 *社内グローバル保障貿易管理体制を確立し、輸出入業務決済システムを構築 *現地従業員の採用人事・グローバル営業体制を設立 *フォード、GM、クライスラー、北米トヨタへ環境にやさしい自動車内装材の提案、新部品生産&量産体制の支援 *アメリカ・メキシコ・EU市場の中長期販売計画&マーケティング戦略の立案 *アメリカ向けの輸物流通システムの構築【生産（日本）→輸出包装→輸出→北米入庫→納入先出荷に至るシームレスなグローバル物流情報管理システムの実行】
2. 共和レザー株式会社	2002年08月～2009年04月	（海外営業部）ドイツ及び米国企業との合弁会社の窓口として、受注、出荷、納期調整を行う中で、輸出管理・輸出書類作成業務に携わる。
<b>4 その他</b>		
1. 6D (Delight) 運動賞 銀賞受賞	2009年4月8日	トヨタ自動車グループ内、そして国内・海外生産工場や本社地域に関連するステークホルダーへの貢献度の提案活動において、社内銀賞を受賞する。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2 学位論文</b>				
1. 「Is Pattern Practice Out of Date?-Reevaluating Pedagogical Heritage of Audio-Lingual Method」	単	2011年03月	On Language and Language education, pp.93-106, Vol14(修士論文)	パターンプラクティスが授業活動から消えた英語授業であるが、オーディオリンガルメソッドとパターンプラクティスの再評価を行った。言語習慣形成、言語の過剰学習、集中的な口頭練習が英語の言語学習にポジティブな影響を与える可能性を分析し、検証した。
<b>3 学術論文</b>				
1. 時事英語ニュースを活用した大学3・4年生対象のリメディアル英語授業<実践授業>(査読付)	単	2020年02月	Mukogawa Literary Review No. 57 p. 55-65	1・2年次の必修科目である語学単位が未取得である上級学年へのリメディアル英語教育の実践と検証である。英語学習から遠ざかり、英語に対する苦手意識を持つ受講生に対して、いかに授業に向かわせるかという点で、専門分野と就職活動中に触れる時事問題を学習コンテンツにした英語ニュースを協同で理解していく授業運営に注力した。
2. The Effectiveness of Minute Paper to Create a Positive Learning Community? (査読付)	単	2018年3月	Mukogawa Literary Review No. 55 P. 21-34	本研究では、学習者に向けた教員の肯定的な承認が持つ意味に着目し、学習者と教員間のラポート形成が学習者の学ぶ意欲にどのような影響を及ぼすのかを質問紙調査から検証した。そして、効率的に語学を学ぶ授業環境を作り出す上で、教室内における英語学習者と教員とのラポート(信頼)形成の要因を、学習者と共に実施した振り返り記録から分析し、学習意欲を継続させていく学びの空間=コミュニティー醸成の可能性を検討する。
3. 自律学習eラーニングの英語学習と学習習慣に関する調査	単	2017年09月	情報教育研究センター紀要 Vol. 25, P. 4-7	日本の大学生の授業外の学習時間の少なさが問題として挙がる中でeラーニングは、学生の自学自習の時間確保を担う手段でもある。本調査では、初年次教育の一環としてeラーニングによる英語学習を一年間経験した学生を対象に、学習者の学習環境や学習計画性、そして教員の働きかけに関する質問紙調査を行なった。アンケートの結果を踏まえた上で、自律的に学ぶことのできる学生を育てていくeラーニングの可能性について考察した。
4. 入学前英語教育について考える(査読付)	単	2017年03月	Mukogawa Literary Review No. 54, P. 55-67	学力試験に依拠しない幅広いバックグラウンドを持つ学生への教育支援としてリメディアル教育が行われており、多様な学生の学習形態から生じる基礎学力の欠如を補完する役割である。本報告では、2012年度から2014年度まで3年間行われた入学前教育の実践と入学前教育を修了した受講生アンケート調査から得られた意見を検証し、今後の入学前の英語教育の意義について論じた。
5. Exploring Learners' Patterns of Using the Online Course Tool in the University Classes (査読付)	共	2015年09月	The IAFOR Journal of Education Vol3(2) pp. 54-66	Yoshihiko Yamamoto, Akinori Usami : Online course tools such as WebCT or Manaba+R are popularly used in university classes and enhance learners' understanding of their course contents. However, based on the authors' observation of students, students often do not see these additional materials and messages on Manaba+R. The authors encourage their students to use it and, in fact, they put a lot of additional materials of the course or useful messages for their students on Manaba+R. This study investigates what extent students actually use Manaba+R through the semester. Secondly, it tries to find suggestions of how teachers can promote their students to maximize making use of Manaba+R.
6. コミュニケーション能力育成に向けた異質な他者とのグループ活動とグループ編成の授業実践(査読付)	単	2014年11月	Studies in Language Science Working Papers, Number4, pp. 43-54	学部も学年も様々である学生が集う再履修英語は、多様な背景を持つクラス集合体である。この多様性に注目し、社会的ニーズの強いコミュニケーション能力を育成するグループ活動の取り組みを検証を行った。
7. CALL授業を活性化させるグループ活動-実践的コミュニケーションへの気づき-(査読付)	単	2013年11月	Studies in Language Science Working Papers, Number3, pp. 169-179	CALL教室の個別学習ではなく、聞く側と話す側の双方向コミュニケーションの意識を持たせる音声録音活動の実践報告である。CALL環境やグループ活動に対するアンケート結果からは、個人学習だけでは得ることができない英語への学習意欲向上、客観的な視点の大切さを認識していたことが確認された。
8. プレゼンテーション授業：フィードバックを活用した改善活動の連続と実践(査読付)	単	2012年11月	Studies in Language Science Working Papers, Number2, pp. 87-97	「ビジネスプレゼンテーション」授業の学生相互フィードバックを活用した改善活動とその継続的実践の報告である。プレゼン発表後の聴衆の評価やフィードバックを一過性の確認だけに終わらせるのではなく、“改善”を連続的にプレゼンテーション演習へ反映させる取り組みを実施し、検証した。
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
1. A Pilot Study on the effects of a short interaction with non-native speaker in class on students' learning motivation to improve English skills	単	2017年08月	大学英語教育学会 第56回 2017年度国際大会	CALL system are commonly incorporated into curriculum for the English language learning. Together with the development of information technology, most of attention in CALL class has been focused on any contribution to improving speaking proficiency on computer. However, the author question how CALL programs enhance students' motivation toward practicing their acquired skills outside of the classroom. The aim of this study is to investigate a contribution a non-native-speaking Teaching Assistant (TA) can make on CALL learning. Besides, this study explores how an even short time of a practical English interaction with TA influenced students' learning attitudes to improve English skills.
2. ライティングプラザ設立と授業外学習支援の可能性	単	2016年11月	2016年度大学英語教育学会 関西支部秋季大会	自律した書き手へと成長する過程を継続的に支える目標で、2016年4月に本学図書館にライティングプラザが設立された。ライティングに関する学生利用やチューターと個別対話を通じた多種多様な書き物へアドバイスなどについて、設立経緯や利用後の学生アンケートを検証し、授業外の場における英語ライティングをサポートしていくライティングプラザの可能性を検証した。
3. 大学導入授業における双方向型コミュニケーションの実践と効果	単	2016年08月	日本リメディアル教育学会第12回全国大会	多様な入試選抜方法を経た新入生には、高等学校までの学習履歴や入学決定時期の違いから基礎学力、学習習慣、そして学習意欲の観点で多様な学生グループが存在している。授業外学習時間が極端に減少した学生もおり、大学生活や授業スタイルへ円滑に移行できることを目的として、初年次教育で学生一人ひとりとの対話を目指す双方向型交流の取り組みを検証した。
4. 日常的な授業の取り組みを刺激するコミュニケーションシートの活用と実践	単	2016年03月	日本リメディアル教育学会、第8回関西支部大会	学生一人ひとりの積極的な授業参加を目指したコミュニケーションシートの実践報告を行った。シートには学生自身が振り返る授業内の自主的発言回数や学習成果を記録してきた。とりわけ自由記述欄には、理解出来なかった内容、さらにその授業に刻む何気ない一言も書いてもらった。学期末アンケート調査では、教員のコメントと自己評価が書かれたシートを見ることで、授業をより身近に感じ、自分を応援するシートになったことがわり、学生個々の能力や授業準備の把握に役立つことも明らかになった。
5. 英語リメディアル授業における時事ニュースを活用したグループ活動	単	2015年11月	日本リメディアル教育学会 第4回 関東甲信支部大会	大学3年生以上を対象とした再履修授業は、基礎的英語学力の習得を目標としている。また、英語に苦手意識を持つ上級生が卒業に向けて、必修英語科目の単位回復を目指す位置づけでもある。本発表では、上級生の背景知識を活用した英文ニュースの読解グループ活動の実践例を報告した。専門科目や経済ニュースだけでなく、スポーツ等に関連する時事英語ニュースをクイズ形式で取り挙げた活動から、語学授業と英語学習に対するモチベーションの変化を検証した。
6. "Exploring Learners' Patterns of Using the Online Course Tool in the University Classes"	共	2014年11月	The International Academic Forum (IAFOR), The Second Asian Conference on Society, Education and Technology 2014	Yoshihiko Yamamoto, Akinori Usami 大学授業にてWebCTやManaba+Rなどのオンラインコースツールは広く使用され、学習者の授業理解を促進している。今回の研究では、1) 学生の使用頻度、2) 教員のオンラインコースツールへの取り組み、3) 英語成績とオンラインコース利用状況の相関性について、アンケート調査、分析を行った。
7. 「入学前英語講座・通学型英語授業の取り組みと検証」	単	2014年08月	日本リメディアル教育学会、第10回全国大会	過去3年間の入学前講座を検証する上で、本講座を終了した1回生から3回生の学生の声が重要であった。講座修了生が入学後に直面した学習課題や英語授業に対する意識をアンケート調査及び8名にインタビューし、入学前講座の課題を提案する。
8. 「学習意欲と授業参加を促すウォームアップ活動の実践」	単	2014年08月	大学英語教育学会 第53回 2014年度国際大会	英語リーディング授業において、授業開始時に国内外のニュース記事を読む活動を取り入れた。発表では、学生のアンケート結果を検証し、今回の授業導入活動が、どのように英語学習や専攻分野へ学習意欲、授業参加につながるかを提案・発表した。
9. 「早期入学決定者への通学型リメディアル英語講座の実践と検証」	単	2014年03月	日本リメディアル教育学会、第6回関西支部大会	早期入学決定者が受講する通学型の入学前講座の報告。先輩TAもサポートする少人数制と基礎英文法の復習を特色とする授業を受講生からの声とアンケート結果から発表。
10. 「経済学部2回生へのESP (English for Specific Purposes) 導入：将来の専門課程とキャリアからの英語ニーズを意識させる取り組み」	単	2013年11月	2013年度大学英語教育学会 関西支部秋季大会	企業の株価変動の要因をグループで調査していく活動の実践報告である。グローバルに展開している企業追跡だけではなく、その調査と分析結果のまとめをグループ発表として形にしたESP授業の意義について考察した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
11. 「株式会社市場から捉えるグローバル企業の動きを題材としたプレゼンテーション授業」	単	2013年05月	大学英語教育学会 ESP研究会関西支部 2013第1回研究会	経済学部専門教員から得られたニーズ分析と将来所属していく企業での英語ニーズを結びつける実践授業の発表である。プレゼンテーションの内容を新鮮度が高い現在の企業活動と経済情勢に関連付けた学生の取り組みを紹介した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 産学連携によるグローバル人材の育成～国際業務力からの実践的な英語教育の接合～	共	2020年02月21日	第4回武庫川女子大学研究成果の社会還元促進に関する発表会要旨集、pp. 25-32. 武庫川女子大学教育研究社会連携推進室発行	三宅弘晃 三浦秀松 山田慎人 宇佐美彰規 辻和成 産学連携を通じて、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指すプロジェクトにおいて、本学科の取り組みとして「サービスラーニング活動の立ち上げ」を担当。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C	共	2017年04月～	日本学術振興会	採択課題名「英語論文執筆における学習者のスタンス表明—機能言語学の知見を利用して—」（代表川西慧・研究分担者宇佐美彰規）申請時に208万円助成。ライティングプラザを活用した学習者のライティング活動も調査対象とする。
2. 『さらなる大学教育質向上のために』教育・改革プランライティング・プラザの設置	共	2016年08月～現在		ライティング・プラザ（英語ネイティブによる個別指導）を学内（図書館5階）設置し、学生の英語ライティング力向上を支える環境整備を促進する学際的事業である（設置・初年度運営費359万円）。稼働率は初年度より75%以上を継続している。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2019年04月～2020年03月	大学英語教育学会 関西支部事務局 財務幹事
2. 2017年04月～2018年03月	大学英語教育学会 財務委員
3. 2016年04月～2017年03月	大学英語教育学会 関西支部事務局 財務幹事
4. 2013年04月～現在	日本リメディアル教育学会
5. 2012年06月～2014年03月	電子語学教材開発研究部会・事務局長（外国語メディア教育学会内）
6. 2012年04月～現在	外国語教育メディア学会
7. 2011年04月～現在	大学英語教育学会